

住民説明会の雰囲気と実施方法が協議参加勧誘に与える影響-地層処分場を題材に-

東北工業大学 学生会員 ○宮本 歩武
東北大学 正会員 青木 俊明

1. 背景と目的

廃棄物処分場や空港などは、社会的に必要であることは理解されやすいが、近所に建設されることはあまり好まれない。こうした施設は NIMBY(Not In My Back Yard)施設と呼ばれ、事業を行う際は、利害関係者同士で対立が生まれやすく、合意形成が難しい。

この対立が起こる要因は、受益圏と受苦圏という概念から説明ができる。受益圏とは、その施設ができることで恩恵を受けられる集団を指す。一方、受苦圏とは、その施設から苦痛を受ける集団を指し、その範囲は受益圏より狭く、限定的であるといえる。このように、受益者と受苦者の対等ではない関係性が対立の大きな要因となり、合意形成が難しくなっている。

円滑な合意形成には、手続き的公正が重要であるとの知見が、先行研究で明らかとなっている。例えば、藤井ら¹⁾は、利害対立の場面において、人は手続きが公正であると感じた場合、自分に利己的損失がある結果でも、不満は小さくなると指摘している。尾花ら²⁾は公共事業の手続き的公正は、事業主体への信頼に影響を与えることを報告している。

信頼関係の構築には、十分な議論の場が必要である。しかしながら、実際は住民説明会に参加する住民は多くない。その理由の一つに、住民説明会の雰囲気が悪さが考えられる。つまり、罵詈雑言が飛び交う状況では、議論への参加を希望する人は多くない可能性がある。このような状況を改善する方法の一つとして、声の大きさや声色の影響を抑制できるオンラインチャット(OC)の活用が考えられる。議論参加への動機はいくつかあるが、説明会の雰囲気や実施方法が協議への参加意欲に与える影響を検討した研究は多くない。そこで本研究では、住民説明会の協議形式および雰囲気が、次回以降の住民説明会への参加意欲に与える影響を明らかにすることを目的とする。

2. 実験方法

(1) 討論実験の内容

住民説明会を模した集団討論実験を行い、影響を検討した。議論では、高レベル放射性廃棄物処分場の受け入れの是非について議論してもらった。田中³⁾によると、高レベル放射性廃棄物処分場の立地に対する態度は、原子力発電所の立地に対する態度より厳しいと指摘しており、NIMBY 施設の中でも迷惑度、嫌悪感が高い施設であるといえる。こうした理由からこの題材を採用した。討論は 5 名から 7 名で実施し、事業の説明と司会進行を行う行政役と、出席者である住民役を設定した。討論は約 40 分間行い、終了後質問紙調査を行った。

(2) 質問紙の内容

質問項目には高レベル放射性廃棄物処分場に対しての認識(処分場への嫌悪感、社会的必要性、リスク感、関心度、損失感、利益感、受容意向)や、議論の満足感(手続き的公正感や雰囲気の良さ)、議論に参加することの精神的面倒さ、次回以降の参加意向、個人属性(年齢、性別)を設定した。回答には 7 件法(1:まったくそう思わない,...,7:強くそう思う)を用いた。

表 1 参加者の概要

総被験者数	72 名
平均年齢	19.58 歳 (max 25, min 18)
年齢の SD	1.23
男性の人数	51 名
女性の人数	21 名

表 2 各条件の参加者数

雰囲気	協議方法	人数(女子)
普通	OC	17 名(3 名)
悪	OC	23 名(6 名)
普通	対面	11 名(12 名)

(3) 実験条件

「協議形式(OC・対面)」と、「説明会の雰囲気(悪・普通)」の2×2の要因配置実験を「雰囲気悪」×「対面」条件を除いた3条件で行った。各条件の参加者数を表2に示す。

OC条件では、Google Meetを用いて、顔を出さずに匿名で文字のみの議論を、対面条件では、教室で顔を合わせ、口頭での議論を行ってもらった。

次に、雰囲気について、「雰囲気悪」条件は雰囲気を荒らすサクラをグループ内に配置し、荒い口調や他人の意見に対して否定を多くするなど雰囲気を操作した。「雰囲気普通」条件は特に操作を加えず、自由に議論を行ってもらった。

3. 分析結果

まず、変数の内的整合性を検証するため、信頼性係数(Cronbach's α)を算出した。一般に信頼性係数は0.7以上であれば、信頼性良好と判断できるが「リスク感」のみこれを下回った。しかし、他は0.7を上回ったため、継続して分析を行うこととした。次に、個々の変数の平均値と標準偏差(SD)を算出した。

各変数で評定値に差があるのか検証するため、3条件、「OC 普通雰囲気」、「OC 悪雰囲気」、「対面普通雰囲気」を独立変数、各質問項目を従属変数として一元配置分散分析(ANOVA)を行った。その結果、「利益感($F(2,69)=10.14, p<0.001$)」、「手続き的公正感($F(2,69)=4.29, p<0.01$)」、「雰囲気の良さ($F(2,69)=7.24, p<0.01$)」、この3つの項目で有意差があることが判明した。一方、「参加意向($F(2,69)=0.745, p=n.s.$)」と「損失感($F(2,69)=2.00, p=n.s.$)」では有意差は見られなかった。

以上5つの項目の評定値を図1と図2に示す。有意差が見られた3項目について、いずれも対面普通雰囲気が両OC条件以上に高い数値を示している。よって、OC方式自体が公正な手続きといい雰囲気を感じにくくしており、処分場が建設されることのメリットも感じにくくしていた可能性があると考えられる。

次に、各群の独立性を調べるために3つの協議形式とグループ意見の賛同態度でカイ二乗検定を行った。その結果、3群間で有意差は見られなかった。

($\chi^2(2)=0.519, p=n.s.$) 普通の雰囲気の場合、グループの意見を受容する割合がどちらも7割を超え、高くなっていることが分かった。つまり、冷静な議論の場

合、グループ内での結論を受け入れやすい傾向が明らかとなった。

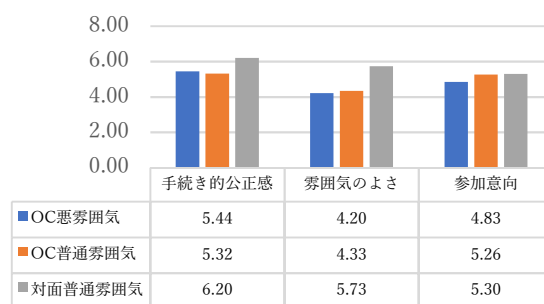


図1 議論の満足感と参加意向の平均値

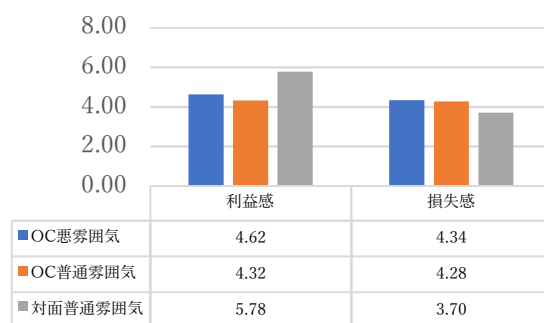


図2 利益感と損失感の平均値

4. 結論

本研究では以下の3点が明らかとなった。

- ・説明会の雰囲気、協議形式の違いが次回以降の参加意欲に影響をおよぼす可能性が低いこと。
- ・対面協議の方が、OCより雰囲気も良く、公正な運営だと評価されたことから、OC自体が丁寧な議論を感じにくくしていた可能性が高いこと。
- ・冷静な議論の場合、荒れた雰囲気より、グループ内の結論を受け入れる可能性が高いこと。

以上のことから、対面、OCどちらで行っても次回以降の参加意欲は変わらないが、悪い雰囲気は合意形成をする際に悪影響を及ぼしている可能性があることが分かった。

参考文献

- 1) 藤井聡, 竹村和久, 吉川肇子(2002) 「決め方」と合意形成—社会的ジレンマにおける利己的動機の抑制にむけて(土木学会論文集 2002年2002巻709号13-26)。
- 2) 尾花恭介, 広瀬幸雄(2008) 公共事業計画の手続き的公正さが事業主体の信頼に及ぼす影響と自由裁量の調整効果(土木学会論文集D 2008年64巻4号557-566)。
- 3) 田中豊(1997) 高レベル放射性廃棄物地層処分場立地の社会的受容を決定する要因に関する社会心理学的研究(動力炉・核燃料開発事業団 研究開発報告書 PNC TN1420 98-001)。